

40 ヤッコソウ【奴草】(ラフレシア科ヤッコソウ属)

指定 昭和 48 年 3 月 8 日 町指定天然記念物(植物)
所在地 小島
管理者 小島集落

ヤッコソウは世界最大の花として有名なラフレシアと同じラフレシア科の植物で、スダジイやツブラジイなどの根に寄生する一年草。形が江戸時代の「奴」に似ていることからこの名が付いた。

花茎は高さ 4~7 ㍍、直径 10 ミリ以下である。鱗片状の葉を茎上に交互直角に対生しふつうは 6 片であるが、北限(徳島県)では 3 対、南限の沖縄方面では 8 対と増減する。開花期は鹿児島地方で 11 月上旬。7 月頃、つぼみの原基が半球状のいぼとして奇主根上に現れ、しだいに大きくなり、このいぼ(寄主の皮層)が破れて椀上となり、その中からヤッコソウが現れる。開花時は全体が乳白色であるが、組織が死ぬと褐色に変わる。受精したもの、特に子房は完熟時まで白斑を残すが、のち赤味を帯び、甘みのある液果になる。その後子房と花柱との境目が切れ、果肉が柱頭を押し上げて成熟した種子塊が出てくる。種子の散布は雨水または動物による。受粉はメジロによると言われるが、観察していると、蜜の少ない時は、メジロが背伸びしてのぞき込むように、葉液の底にくちばしを突っ込んで、額を柱頭に接触し、受粉の介添え役を務めることになるが、多くの場合、蜜があふれるほど出ているので、メジロは水平にくちばしを伸ばして、花から花へゆうゆうと蜜を吸い歩き、あまり受粉の実効はない。昆虫、特にハチが受粉の主力をなすらしいが、九州本土や四国では開花期に気温が低いので、ハチの活動がにぶく、受粉の役割をすることが少ない。屋久島・種子島以南では気温が高いのでハチの活動も盛んで、受粉率も高い。

ヤッコソウは、嘉永年間(1848~53)、^{なごやさげんた}名越左源太が『南島雑話』の中で、珍しい植物があると図入りで説明している。また、明治 10 年には、大隅地方で見つかったことが記録に残っている。明治 41 年(1908)、牧野富太郎が新科・新属・新種の植物として発表したわが国の珍種の一つ。四国(徳島県・高知県)・九州(宮崎県・鹿児島県)・屋久島・種子島・奄美・沖縄に分布する。